すが」

坂元　「合理的にものを考えるといっても根本的には〝お父さんの芽〟というようなものに通じる考えにもとづいた合理性、これはほんものではない。部分的に科学性でも、そのまま将来の科学性とは違い、やがて時期がきて変っていくもの、これを区別することを太田氏は述べられたと思います。私は科学性ということばを使おうと使うまいと、それ以前にたいせつなことがあるからそれを指導していくべきだと思います。なぜだろう、どうしてだろう、と思わない子もいます。それをすべての子に思わせるようにするのがいいのか？　レディネスのある子とない子といるのであって、童話的な考え方の中にいる子があってもいいのではないかと思うのですが……」

E　「レディネスのない子にそれをもたせるのには、どうしたらよいでしょうか」

坂元　「どうして？　という疑問をもつのは、一つは発達でもあるが、一つはま

（書）（評）

守屋光雄著「発達心理学」

松村康平

この本は、他の本とは異なる現代的な意義をもつ。この本は、人間の初期の発達を中心に、理論的研究と実践的活動のどちらをも深め、推進するのに役立つ特性を備えている。

内容は、一五章にわかれている。児童観の変遷・発達と人格形成・胎児の行動発達・胎教・新生児の発達・乳児の発達・保育問題・言語の発達・描画の発達と診断・思考の発達・遊びの発達・親子関係と人間形成・問題児の人格・発達検査—知能検査。

著者の優れた前著「乳幼児心理学入門」（臼井書房、昭二六）および「幼稚園児」（金子書房、昭三〇）に次ぐこの本には、その間に著者がたゆまず続けてきた研究と実践の成果が、取りいれられていて、幅広く重厚さを増し、その底を著者の生活原理が流れている。それが、他の研究者・保育者の業績を尊重することと共存するものであることを知って、読者たちは、この本を貫ぬく生活原理への親しさを感じるのではないだろうか。

著者は、この本を「中間的専門書」の類と、その序で述べている。これを、研究「即」実践、実践「即」研究の立場から筆者がとらえるとき、この本は、実践的価値の高い専門書であるといえる。

（朝倉書店、A5四二〇ページ、一〇〇〇円）